
ミラクルボイス☆七海ナオ☆

こだま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミラクルボイス☆七海ナオ☆

【Nコード】

N9984M

【作者名】

こだま

【あらすじ】

小学5年生の直子には誰にもいえない秘密がある。

実は彼女は七色の声を自由にあやつる人気声優・七海ナオだったのだ。

恋に仕事に友情に、小学生声優・ナオが大活躍する児童向けライト小説！

1. 覆面声優・七海ナオ登場

「勝ちたいなら方法はただひとつ。勝つまで絶対にやめないこと！」

いつもの決めゼリフを力強く言い終えた直子は、ガラスの向こうの返事を待った。

「はい、お疲れさん」

コントロールルームから、監督の声が届く。

別名・金魚鉢とも呼ばれるブースから飛び出した直子は、ショートボブの頭を下げて監督らスタッフに謝った。

「本当にすみませんでしたっ」

「すみません、で済んだらプロじゃないよ」

自分でOKを出したくせに、ヒゲ面の新しい監督はネチネチいやみたらしい。

小さな体をさらに小さくしてうつむいた直子は、自分は今日一体何回NGを出したんだろう？とこっそり数えた。

ここはサッカーアニメ『ドリブルハート』のアフレコ現場。

ヒゲ面の監督は、サンガラスの奥から主人公・ヒロキ役の直子をじろりと見下ろした。

「君、好きな人はいるか？」

「えっ、す、好きな人ですかっ？」

思わず声が裏返ってしまった直子に、ヒゲ監督は厳しい口調でこう言った。

「いいかい？ヒロキは本当はあの子が好きなのに、冷たくしてしまった。そういう気持ち、わかって芝居してくれよ」

「はあ」

「やっぱりこういうのは人生経験がモノをいうんだよなあ。悪い

けど、君みたいに若けりゃいいってもんじゃない」

「すみません：あつ」

また言ってしまった。

「ま、今日のところはお疲れさん」

「：ありがとうございます」

直子は唇をかみしめもう一度頭を下げた。

渋谷の録音スタジオを出ると、外はもう薄暗かった。十一月の冷たい風が吹き付ける。細い体をぶるっと震わせ、紺色のピーコートのポケットに手を突っ込んだ直子は、低くうなった。

「うーっ、くやしい」

さっきのヒゲ監督の言葉を思い出す。

好きな人はいるかだと？

若けりゃいいってもんじゃないだと？

言いたい放題言いやがってっ！

直子は、リスに似た黒目がちな瞳をくると動かし上を向いた。こうすればこみあげてくる涙を流さずにすむからだ。

泣いてはいけない、仕事だもの。

責任は、うまくできなかった自分にある。

妥協や甘えは一切通用しないのが、この世界。直子が小学生だからって、例外はない。そんなこと、声優の仕事を始めたときからわかっていた。

えっ、小学生が声優？

まっさかあ、と笑ったその君。

いまはアイドル、俳優、演歌歌手、それから手品師、漫才師でも小学生が活躍する時代だ。アニメに声を吹き込む声優をしている小学生がいても、驚くことはないだろう？

「くそう、負けるもんかっ。次の収録は絶対一発OKとってやる！」

決意も固く渋谷の街をゆく、ちょっと勝ち気なこの少女は、港区立赤坂第一小学校五年一組の市川直子。彼女こそ、年齢・出身地す

べてのプロフィール非公開の、噂の覆面声優・七海ナオの正体だ。
七色の声を自在に操る彼女を、人は『ミラクルボイス・七海ナオ』と呼ぶ。

2. 恋の予感

「さくら、また好きな子変わったでしょ」

「やだあ、なんでわかるの？直子もしかしてエスパー？」

図書室の本棚を見上げていたさくらは、大きな目をさらに見開き直子を見た。

「んなわけないでしょ」

超能力がなくなつて、入学以来の仲良し江並さくらの行動パターンなら直子にはだいたいわかる。ファッション誌しか読まないさくらが放課後図書室に足を踏み入れるなんて、理由はひとつしかない。

「うふ、恋しちゃった」

「やっぱり…」

五年に進級してからだけでも、さくらはなんと好きな子を四回も変えている。

「野球部エース城野くん、絵画コンクール金賞受賞の寺下くん、校内水泳大会優勝の菅井くん、それから音楽発表会で指揮者だった井上くん。人気者を次々狙ってあつという間に飽きる。知ってる？あんた赤小の魔性の女って言われてるんだからねっ」

「ひっどーい、なにそれ」

「でしょ？だからこれ以上純情な男子の心をもてあそぶのはやめなさい」

「魔性の女なんて、なんかオバさんくさいわ。せめて小悪魔って呼んでほしい」

「そっちかい！」

原宿の有名美容室で月イチお手入れする栗色ウェーブヘアを、指

先でくるくるしているさくらに反省の色なし。直子と話している間も大きな瞳は、図書室にかっこいい男子がいないかチェック中だ。

その様子を見た直子は、ため息をついた。

ガーリーなさくらとボーイッシュな直子。

ボケのさくらとツツコミの直子。

雰囲気の違いふたりだが、なぜか気が合いクラスが別々の今も一番の仲良しだ。

あまりに違いすぎてお互い妙なライバル心が生まれないのと、方向性は違うけど、さっぱりあっさりからりと明るい性格だけは似ているせいかな、と直子はさくらとの友情を分析している。

「で、今度の犠牲者は誰？」

「犠牲者だなんてひどーい。直子なんか好きな人もいないくせに」
「う」

昨日の収録の記憶がよみがえる。

「またその話か」

うなだれる直子の顔をさくらが不思議そうにのぞきこむ。

「どうかした？」

「…何でもない」

直子が七海ナオであることは、仲良しのさくらにも秘密だった。絶対に自分から正体を明かさないこと。この仕事をはじめるときにパパとママが直子に出した条件だ。

おかげで騒がれも、いじめられもせず、直子は平穏な小学生ライフを送っている。仕事のせいでさくらと遊ぶ予定を断らなくちゃいけないときは、申し訳ない気持ちになるけれど、これだけはパパとママとの約束だから仕方がない。

「で、今度は誰を好きになったの？」

気を取り直してたずねると、さくらはえへんとせきばらいして発表した。

「今度は、上原颯太くんです」

「栄養はぜーんぶ身長に行っちゃって、頭の中はバスケのことだ

けの、あのアホ颯太？」

「好きなことに熱中している姿って素敵よ」

「でもサル顔だよ？」

「顔なんかどうでもいいの。あたしの場合、美しい顔が見たかったら鏡を見ればいいわけだし。人は自分に欠けているものを持つ相手に惹きつけられるの」

「なるほど。あんたは欠けているものが多すぎるから、いろんな男子を好きになってしまっただけだ」

直子がからかうと、さくらは唇をとがらせた。

「失礼ね、まだ恋を知らない直子には理解できないのよ」

「はいはい。で、なんで図書室に来たわけ？ 颯太なら今日も校庭でバスケだよ」

「実はね、さっき職員室で顧問の吉田先生が話してるの聞いちゃったんだ。次の日曜日、ミニバスケ部が練習試合するんだって。だから応援に行こうと思って…あ、あった」

お目当ての本『バスケットボールルール解説』を見つけたさくらがにんまりする。

「これから颯太くんと一緒に読んで、教えてもらうのよ。ね、いい作戦でしょ？」

「言っとくけどあいっほんとにアホだよ。めっちゃめっちゃ漢字に弱いし、本なんか一緒に読むかなあ？」

そう、あれは颯太と同じクラスになったばかりのことだ。

「うちの父ちゃんがすっげー面白い映画があるって言ってたんだけどさ、メルなんとかの『みだいきん』って見たことあるか？」

颯太が大声で話していたので、それはメル・ギブソン主演の『身代金』だと、直子は親切に教えてやったのだ。

次の日、『身代金』を無事レンタルした颯太は、教室に入るなり興奮ぎみに「すげえな」を連発し、直子に話しかけてきた。

そうか君もあのサスペンス映画の面白さがわかったか、とうなずいていたら、颯太は真顔でこう続けたのだ。

「ハリウッド俳優ってマジすげえな。だって全員日本語ぺらぺらだぜえ」

「ちがーうっ！」

直子は颯太の勘違いを全力で訂正した。

「あんたが見たのは日本語吹き替え版！」

洋画における声優の役割を説明したら、颯太は細い目をぱちくりさせて驚いていた。

「市川、お前って物知りだな」

この一件のあと、席替えで隣の席になってからは、読めない漢字があったりすると颯太は必ず直子に聞いてくるようになっていた。

「颯太くんてかわいい。天然なのね。ますます気に入っちゃったじゃ、行ってくるわ」

直子が止めるのも聞かず、さくらは本を抱えてスキップで図書室を出て行った。

数分後、校庭の隅にあるゴールポストの下には、背の高い颯太と、首をかしげるようにして彼を見上げるさくらの姿があった。

「颯太くん、バスケのこと教えて！」

「お前バスケ興味あんの？」

「試合がんばってね。応援してるから」

「サンキュ」

図書室の窓から眺めていた直子は、ふたりの会話をアテレコしていた。

「ま、颯太がさくらのえじきとなるのも時間の問題だね、わははは……」

笑っていた直子の胸がちくりと痛んだ。

ん？ いまの何？

窓を閉めながら、直子は自分の心臓のあたりに手をやって首をひねる。

「お腹すいたせいかな。さ、帰ろ帰ろ」

その夜直子は、晩ご飯をお腹いっぱい食べ、八時前には布団に入

った。颯太の隣になって以来欠かさなかった国語の予習は、なんだからやる気が出なくてさぼってしまった。

3. 練習試合とコンビ解消

翌朝直子が登校すると、五年一組の教室ではちょっとした騒ぎが起きていた。

「どういうことだよ!」

太い眉毛を逆立てて怒っているのはミニバス部キャプテンの大野だ。わざわざ隣のクラスから乗り込んで来るとは、何事だ?

「ドラゴンミニバスチームと練習試合することになったって本当なのか?」

大野の質問に颯太がうん、とうなずいた。

「吉田先生に俺が頼んだ」

「ふざけんなよ!」

大野は颯太につかみかかった。

背の高さもサル顔も同じだけど、がっちりした大野と細い颯太が並ぶと、気の荒いゴリラと調子のいいくもざるって感じた。

「毎年地区優勝のドラゴンと試合だなんて無理に決まってるだろ。わざわざ試合申し込んで惨敗なんて赤小の恥だっ。俺が塾で休んでいる間に勝手なことすんな。今から断れ、いいなっ」

息巻く大野にくってかかったのは、同じく隣のクラスまで出張してきたさくらだった。

「ちょっと! 颯太くんが決めたことにケチつけないでよっ。あんななんか受験にびびってもうすぐミニバスケ辞めるくせに!」

「うるせえ! 江並お前関係ないだろっ、だいたいなんでここにいるんだよっ。おい颯太っ、聞いてんのか!」

大野が顔を真っ赤にして叫ぶと、颯太はきっぱり答えた。

「試合はやるよ。俺、どうしても出たいんだ」

「俺は出ないぞっ。ついでにお前とはもう絶交だっ」

大野は颯太を突き飛ばし、教室から出て行った。尻もちをついた颯太は、てへへと恥ずかしそうに笑って見せた。

颯太のところへさくらがかけよるのを見ていた直子は、なんか妙だなと思った。

大野とはミニバスでコンビ組むほど仲がいいのに、絶交を言い渡されても平気だなんて、一体颯太はどうしちゃったんだろう？

4. 努力はムダ？

放課後、直子はさくらにひっぱられて校庭の隅にあるバスケット練習場にいた。さくらは朝の騒ぎに便乗し、なんとミニバス部のマネージャーに名乗りをあげたのだ。

「それはいいんだけどなんでわたしまで？」

「いいじゃない、友の恋を応援するのが女の友情ってモンでしょ」

「いまさらわたしが応援しなくて大丈夫。昨日だって颯太と話盛り上がったんでしよう？」

「うふふ、まあね」

さくらは余裕の笑みを浮かべた。

それを見た途端、直子の胸がずきっと痛んだ。まただ。昨日からなんか変だ。悪い病気だったらどうしよう、と心配しながら直子はミニバス部の様子に目を向けた。

颯太たちが試合に向けて練習中だ。

大野の姿は、やはりない。

「大野のやつ、塾があるから試合は出ない、って吉田先生にわざわざ断りに行ったのよ。あー颯太くんかわいそう。なんとかならなかしら」

「でもとりあえず試合のメンバーは足りてるんでしょ？」

直子はコートで練習する部員を数える。

中学受験を控えた六年生が抜けたあとは、五年の颯太と大野でチームをひっぱっていた。メンバーはほかに四年と三年がふたりずつ。残りは一、二年のおちびちゃんが六人。

実は、赤坂第一小ミニバス部は弱い。

連戦連敗、このあたりじゃ知らない者はいないくらい弱いのだ。四年生の取り損ねたボールがコートを飛び出した。それを低学年のおちびたちが一斉に追いかけて、気がつけば鬼ごっこになっている。なにがおかしいのか全員笑顔だ。

もちろん颯太もにこにこ笑って、下級生たちに根気よく教えている。

楽しそうなのは結構だが、とても週末に強豪チームとの対戦を控えたチームには見えない。

「…大野、戻って来るといいね」

「だよねえ」

直子とさくらはうなずき合った。

休憩時間になり、さくらはタオルを手に颯太にかけよった。

直子は遠くに転がったバスケットボールを見つけた。誰も気づいてないみたいだから取りに行ってみるか。そう思って、ボールに近づいたが、先を越された。

「あ」

大野だった。ふてくされた顔で、直子に狂いのない見事なパスを寄越した。

「ありがと。みんな練習してるよ」

ボールをキャッチした直子が声をかけると、大野はふてくされ顔のまま答えた。

「いくら練習したって、勝てるわけねえよ」

「そんなのやってみなくちゃわか…」

「わかるだろ。きれいな事言うな」

「言ってるよ」

「じゃあ聞くけど、練習すればあいつらがプロになれるのか？今

度の試合に絶対勝てるのか？」

「それは…」

ずいぶん意地悪な質問だ。

「いくらがんばったって、ダメなもんはダメだ。ムダな努力なんだよ」

大野は吐き捨てるように言った。

「俺は試合なんてやらない。もう帰る」

くるりと背を向けた大野のランドセルに、きらりと光るものが見えた。バスケットボールの形をしたキーホルダーだ。颯太のランドセルにも同じものがついていたことを、直子は知っている。

どんどん遠ざかる大野の後ろ姿で、キーホルダーが「バスケやりたい」って言っているように直子には見えた。

5. 好きなならやめない

「遅刻するーっ」

颯太たちの練習につきあったあと、帰宅した直子は超特急で空色のジャージに着替え、自転車に飛び乗った。

「直子、これ持って行きなさい！」

「いつもありがと！」

ママから受け取った包みを自転車の前かごに放り込む。

「いつてきまーす」

猛スピードでペダルをこぎ続け、大きな神社の裏手にあるオンボロビルに到着した。

ここは週に一度、直子が欠かさず通っている秘密の場所。

あーえーいーうーえーおーあーおー

ビルの外階段をのぼる直子の耳に、謎の呪文のような声が届く。これは稽古前に生徒たちが自主的に行っている発声練習。そこを通り過ぎ、直子は最上階にある扉を開けた。

薄暗い部屋の中は、膨大な数の台本や演劇や映画の本で埋め尽くされている。

「お、来たな」

暗がりでもDVDを見ていた校長が振り返り、にっこり笑った。

ここは『小津虹児声優学校』の校長室兼彼の自宅スペース。背すじをぴんと伸ばしソファに腰掛けている小柄な白髪の老人、彼こそが長年に渡り声優界をリードし、引退後の今もアニメファンから絶大な人気を誇る小津虹児、七十歳。

「じいちゃん、ちよつといい？」

「もちろん」

小津虹児はよく通る洪い声で答えた。そう、彼は直子にとっては父方の祖父でもあった。

狭いキッチンでお茶を淹れ、出がけにママが持たせてくれた栄養バランスばっちりの手作り弁当をふたりで食べるのが、いつものきまりだ。

直子は、稽古前にこの部屋で過ごす時間が好きだ。じいちゃんの話話は、演劇・映画・文学・美術と幅広い上、楽しい。颯太と話すきっかけとなった映画『身代金』を教えてくれたのもじいちゃんだ。直子がじいちゃんの声優学校に通うようになったのは幼稚園の頃。いまでもよく覚えている。大人たちが笑ったり泣いたり、飛びはね踊る姿を生まれて初めて見たときの驚き。

最初は見ているだけだったが、すぐにみんなと稽古場を飛び回るようになった。

マイクの前で台本を読む練習だけが、声優になるための訓練だと思っただけで大間違い。

体力、演技力、表現力、歌唱力、あらゆる力をつけなくてはならない。直子は、演技の基礎をここで学んだ。ひとたび芝居に入ると、人間はおろか動物や物にさえなりきる直子の演技力には、誰もが舌を巻く。

じいちゃんの指導のもと、修行をつんだ直子は、九歳で声優デビ

ユーを果たした。

いま、日本中の小中学生を夢中にさせているサッカーアニメ『ドリブルハート』の主人公・山本ヒロキ役は、声優・七海ナオの当たり役だ。

「どうだ最近調子は。新しい監督とはうまくやれそうか？」

「うーんまあまあ、かな」

直子は言葉を濁す。好きな人は？なんて話、さすがにじいちゃんとはできない。

「演技には人生経験が必要、って言われた」

「ふむ、なるほど。お前さんも難しい要求をされるようになってきたね。まあ叱られるうちが花だよ。とにかく努力あるのみ」

じいちゃんはそう言って、直子の淹れたお茶をうまそうにすすった。

「そのことなんだけど、じいちゃん」

「うん？」

「結果が出なきゃ、努力は意味がない？」

大野の言葉がひっかかっていた。がんばってもダメなものはダメだなんて、思いたくない。だけど、だったらなぜ大野に言い返せなかったんだろう？

直子の話を黙って聞いていたじいちゃんは、静かな声でたずねた。

「ナオは役がもらえないからって、演じることをやめられるかい？」

「やめないよ」

「なぜだい？」

「だって、好きだもの」

あ、と思う。そうだった。

最初は遊び半分、楽しいだけで続けてきた声優修行だけど、いまはすっかりのめりこみ、直子にとって大切なものとなっている。

じいちゃんは、ゆっくりうなずいた。

「この学校も同じだよ。努力は無駄じゃない。たとえば声優になれ

なくてもね。いつも言っているだろう？」

「声優そして俳優である前に、まず人間であれ」

直子が答えると、じいちゃんは満足そうにほほえんだ。

「その通り。結果なんて気にするな。お前や生徒たちにはひとつでもいいから大事なものを見つけてここを巣立ってほしいんだ」

「そうか、そうだね。わたし、稽古始まるまで外走ってきます！」

直子は元気よく立ち上がった。

あーえーいーうーえーおーあーおー

ビルの外階段を降りる直子には、生徒たちの声が、がんばれがんばれ、と言っているように聞こえた。

6. 大イチヨウの下で

ランニングを終えた直子は、腕時計を見た。夜の稽古開始まで少し間がある。そこで、裏の神社にちょっと寄り道することにした。大きなイチヨウの樹にもたれた直子は、目を閉じて想像する。はらはらと黄色い葉を降らせる、年取った大イチヨウのつぶやきを。

「いい夕日だねえ」

こうして何かになりきっているときが、たまらなく好きだ。神社の大イチヨウに狛犬、それから六本木ヒルズや東京タワーにだってなれる。演じているときは、何だってできそうな気がした。

“こんな夕日を見たのは、何十年ぶりかな”

そうつぶやいたとき、大イチヨウの反対側から見覚えのある顔がひょこつと出てきた。

「よっ」

「そ、颯太！」

彼もランニングの途中らしく、ジャージ姿で立っている。

「ぶつぶつ声がするからもしかしてヤバイ人かな、と思っのぞ

いてみたんだけど、なんだ市川かよ。お前ここで何してんの？」

「べっ、別に」

大イチョウになったつもりでしゃべっていた、とは言えなかった。口ごもる直子の隣に、颯太はすんと腰を下ろした。

「今日はありがとな」

「え？」

「ボール片づけとか手伝ってくれて」

「一応マネージャーだから」

「そうだったな。なんていったっけ？もうひとりのマネージャー、あいつ」

「さくら、江並さくらだよ。江戸の江に、並盛りの並、それからひらがなでさくら、の江並さくら。ちゃんと覚えてよね！」

「その江並だけど、あいつってボランティアが趣味なのか？うちみたいなチームを応援するって、よっぽど物好きだよな」

ちがーうっ！好きなのはボランティアじゃなくて颯太、あんたなんだってば！

颯太はさくらの猛アタックにまったく気づいていない。やっぱりこいつ天然だ…。

「物好きには違いはないけど、いい子だよ。…っておいっ聞いているのかっ？」

見れば颯太は落ちてくるイチョウの葉をつかもうとしてぴょんぴょんはねている。

のんきな姿を見ていたら、ひとこと言ってやりたくなった。

「ねえ、本当に大丈夫なの？」

「何が？」

「練習試合のことに決まってるでしょ。大野を怒らせて」

「ああ、あれな。まずいよなあ、あいつ試合に出してくれるかな」

「なんで大野の言うとおり試合をキャンセルしないの？絶対勝てないってわかってるのに…あ」

あわてて口を押さえたが、遅かった。

気まずい沈黙。人生にも台本があればいいのに……。退場だ。颯太の前から消えるしかない、と直子が立ち上がったときだ。

「勝ちたいなら方法はただひとつ、勝つまで絶対やめないこと！」

直子はぎょっとした。どうしてそれを？

颯太がにいと笑って直子を見上げた。

「かっこいいだろ、俺が好きなアニメの決めゼリふ。知ってるか？」

知ってるものなにも。『ドリブルハート』のヒロキのセリフだ。何十回も何百回も言ってきた、大事なセリフ。

「これ、俺のざみぎのめい」

それを言うなら座右ざゆうの銘だっ！

いつもの直子ならびしつと訂正するところだが、今日は何も言えなかった。

「……いいセリフだね」

「だろ？」

颯太はまるで自分がほめられたみたいに得意げに胸を張った。そして、珍しくまじめな顔でぽつりと言った。

「勝てなくてもいいんだ。最後にもう一度、みんなと試合に出ただけだから」

「最後？」

直子は聞き返したが、颯太はそれには答えず直子の腕時計をのぞき込み、「やべ、もうすぐ『ドリブルハート』が始まる時間だつ」と立ち上がった。

「じゃあ俺行くわ。いまの話みんなには言うなよっ。俺はアニオタじゃねえぞっ」

それだけ言うと、颯太は走って行ってしまった。

不思議な気分だった。自分が演じた言葉が、こんなふうに誰かの心に届いていたなんて。

「誰にも言わないよ」

沈んでいく夕日のせいだろうか。直子の目には、すべてのものが金色に映った。

イチヨウの葉が舞い落ちる中、小さくなっていく颯太の後ろ姿から目が離せなかった。

7. 秘密のミラクルボイス作戦

快晴の日曜日。

試合は午前十時に区民体育館で開始。

前日さくらに「時間厳守！」と言われた直子は、時計を気にしながら区民体育館そばのバス停で下車した。ところが歩き始めてすぐ、かわいい声に呼び止められた。

「あのう、区民体育館はどこですか？」

振り返ると、赤小ミニバスケ部低学年のおちびたちが目をうるうるさせて立っている。集団迷子だ。おまけに「僕、おしっこ行きたい」「僕も」ともじもじする子が数名。

「うわあ、もらすな！我慢しろお！」

直子は、おちびたちを連れて近くのコンビニに駆け込んだ。

「まったく世話の焼ける部員たちだ。あれっ？」

ぼやきながら、おちびたちが順番にトイレから出てくるのを待っている、ゴリラっぽい背中が直子の視界に飛び込んできた。

大野が雑誌コーナーでマンガの立ち読みをしていた。足もとにはスポーツバック。ユニフォームもシューズも入っているに違いない。あんなこと言ってたくせに、やっぱり気になってここまで来たに違いない。

直子は、大イチヨウの下で見た颯太の顔を思い出した。

なんとかして大野を連れて行けないだろうか。でもどうやって？自分よりも背が高くて力も強い大野をひっぱっていくなんて、どう考えても無理。…どうしよう。

大野もおちびたちも、まだお互いに気づいていない。

試合開始時刻は刻々と迫っている。

そうだ！

直子は身をかがめて店内を移動した。

大野から見えないよう、お菓子の陳列棚に隠れた直子は気持ちを集中させる。ミニバスケット部のおちびたちになりきるのだ。バスケットが好きで、大野や颯太のことを尊敬しているかわいなおちびたち…。

いまだ！

直子はおちびそっくりの声で叫んだ。

「あっ大野キャプテンだ！」

直子の声に、おちびたちも大野に気づいた。　きゃぷてんだ！と、大喜びで大野を取り囲む。

「な、なにしてんだよお前ら」

「トイレです」「迷子になって」「きゃぷてん何のマンガ読んでいるの」「僕も読みたい」「僕も僕も！」

だめだっ！話がどんどん脱線していく！

口々にしゃべるおちびたちに混じって、直子はもう一度声を出した。

「キャプテン、試合行かなくていいの？颯太くんが待ってるよ！」

直子の声に、大野の表情が変わった。

おちびたちが大野をじっと見つめる。

直子の読みが正しければ、捨てられた子犬みたいなおちびたちに見つめられた大野は、断れないはず。

「…行くよ、行きゃいいんだろっ！」
やった！

大野の言葉におちびたちは歓声をあげた。　直子も陳列棚に隠れて小さくガッツポーズ。

読みかけのマンガを放りだし、大野はコンビニを飛び出していった。体育館のある方向へ走る大野を確認してから、直子はおちびた

ちを数えた。

1、2、3：6人、よし全員いる。

「それじゃあ君たち、体育館まで走るよ！よいスタートっ」

かけ声と共に転がるように走り出したおちび6を率いて、直子は試合会場へ急いだ。

「直子遅い！」

到着したときには、すでに試合が始まっていた。体育館には、さくらが熱心に呼びかけたおかげで、五年一組と二組のみんなも応援に来てくれている。

こっちこっち、と手招きするさくらはひとりコスプレ状態。チアリーダーの格好で、手作りのポンポンまで持参している。

「どうなの？」

「始まってすぐに連続ゴールされて、いま0対10。おまけに今日のドラゴンは二軍チームよ。完全になめられてるわ」

「なるほど。で、大野は来てる？」

「いるけど」

と、さくらは不満そうに大野を指さした。

「大野ったら、颯太くんと口も聞かないのよ」

ぶんぶん怒っているさくらの言葉どおり、大野はまだ颯太と和解したわけではないようだ。ふたりのアイコンタクトができてないから、パスがうまくまわらない。

「ああもうなにやっつてんだふたりとも」

直子がつぶやく横で、低学年のおちびたちがリュックの中をこそごそしはじめた。

「ちょっと君たち、お弁当なら試合のあとにしなさい」直子が叱ると、おちびたちは口をとがらせ「ちがうよ」と答え、取り出した紙を広げはじめた。

「これは…」

直子とさくらは顔を見合わせた。

六人が取り出した紙には、「ゝ」「カ」「ン」「ゝ」「ハ」「レ」

の文字が一つずつ大きくクレヨンで書いてあった。へたくそだけど、一生懸命作ったのがわかる。

おちびたちが掲げた応援文字に、コートにいる颯太と大野、それから残りの選手たちも気づいた。緊張していた選手たちに少しだけ笑顔が戻った。

「赤小ガンバレ、ファイト！」

みんなで声をあわせて応援する。

いい雰囲気になってきたところで、おちびのひとりが直子のシャツの袖をひっぱった。

「僕おしっこ行きたい…」

やれやれ。おちびをトイレに連れて行き、さあ気を取り直して応援だ、と思ったときだ。

直子は、ドラゴン側の選手がにやにや笑ってこちらを見ていることに気づいた。かと思えば、大野はすごい目つきでにらんでいる。

一体何？

応援席を振り返った直子は凍り付いた。

トイレに連れて行ったおちびの分の文字が抜け、残りのおちびが勝手に持ち場を移動してしまい、応援文字がとんでもないことになっていたのだ。

残ったおちびがきまじめな顔で掲げているその文字とは…「」

「ハ」「カ」！

直子は頭を抱えた。

「くうっ。よりによって…バカ」

さくらの顔をひきつらせて叫んだ。

「感動が台無しよっ、なんとかして！」

「お、おちび6集合っ！」

直子は大あわてで全員を集合させ、文字を元通りにした。

コートでそれを見ていた颯太と大野が顔を見合わせ、ぷっと吹き出した。

笑いたいのをこらえていたのだろう。

ふたりはお腹を抱えて大爆笑している。

この笑いは会場中に伝染し、試合も中断する騒ぎになった。

みんなから指をさされ笑われながらも、直子はほっとしていた。

なにはともあれ、颯太と大野が仲直りできた。

間もなく試合は再開し、颯太と大野はすぐに真剣な表情に戻った。互いの目を見て、力強くうなずきあう。

“いくぜ” “まかせろ” ふたりの心の声が、直子には聞こえた気がした。

颯太・大野コンビ復活だ。

「がんばれーっ！」

直子は誰よりも声を張り上げて応援した。

大野の素早いパスを、颯太がしっかりと受け止め、大きくジャンプした。

シュート！

「決まった！」

「きゃあーっ！」

直子とさくららが抱き合って歓声をあげたところで、試合終了のホイッスルが鳴った。

結果は、2対10。

赤坂第一小ミニバス部への負けだった。

颯太たちが晴れ晴れとした顔で一礼すると、応援席からは大きな拍手が送られた。

へたでもいい、負けてもいい。

たといまは結果がついてこなくなっても、好きなんだもの続けていこう。あきらめないかぎり、いつか勝てる 때가来るんだから。

叩きすぎて手がビリビリするまで、直子たちは拍手を送り続けた。

8. さよなら颯太

もちろんがんばったのは颯太たちだけではなかった。低学年のおちび六人組の活躍も忘れてはいけない。

「えーっ、なんであたしがこの子たちの引率しなくちゃいけないわけえ？」

「だって同じ方向お前だけだもん。うちのかわいい後輩を見捨てる気かよ」

大野に言われてさくらは「颯太くんと帰りたいのにい」と、ぶうぶう文句を言ったが、おちびたちにすがるような目で見つめられた末、肩をすくめてつぶやいた。

「まあいいわ。ひとりで帰るのもつまんないし、颯太くんには振られちゃったし。おちびちゃんたちの面倒みてやるわ」

直子は耳を疑った。

振られちゃった？さくらが？

「さ、ちゃんとしていらっしやい！」

さくらはおちびたちに号令をかけると、さっさとバスに乗り込み行ってしまった。

残された直子が呆然としていると、隣からはこんな会話が聞こえてきた。

「颯太、お前江並を振ったのか？」

「え、知らない」

「ふうん。それよかさっきのシュート…」

え、ちよつと待て。

ふうん、で終わりなのか大野？

知らない、ってどういうことだよ颯太？

本当にこいつらバスケットのことしか頭にないんだ。きっと“恋”って漢字も書けないに違いない。魔性の女も、天然には勝てなかったか…。直子はさくらに深く同情した。

やってきたバスが一番後ろの座席に並んで座ると、真ん中の颯太がふたりに言った。

「今日は来てくれてありがとな」

「しょうがねえだろ、コンビニで立ち読みしてたらちびどもがうるさくてさ」

大野が照れくさそうに答えるのを、直子は冷や冷やしながら聞いていた。よかった。どうやら大野は、おちびたちの声を直子がまねたことに気づいていないようだ。

「だけどよお、と大野はぷつと吹き出す。」

「あの応援文字には参ったよな」

「バカ、だもんなあ。市川あれって作戦？」

「んなわけないでしょっ」

直子が真っ赤になって答えると、颯太と大野はまたげらげらと笑い出した。それを見ていたら、直子もつい一緒に笑ってしまった。

三人の笑いがおさまった頃、颯太が思い出したように、あそうだと云った。

「俺さ、二学期終わったら転校するんだ」

えっ？

大野と直子は同時に颯太を見た。

颯太はなんでもなしのよう続けた。

「うちの父ちゃん、勤めていた会社がつぶれて、夏じゅう職探ししたんだけど全滅でさ。結局父ちゃんの実家に帰ることになったんだ」

「実家ってどこだよ？」

「青森。しかもすげー山人中」

青森：遠すぎる。直子はバスの椅子からすべり落ちそうだった。

「じいちゃんの畑でリンゴ作るんだ。これからは農業だとか言って、父ちゃんも母ちゃんもすげえ本気モードで止められねえの」

「まいったよ、と颯太は笑う。」

「今度の学校さ、バスケ部ないんだ。全校生徒集めても、10人いないし。いやー、転校する前に試合ができてよかったよ」

最後、ってそういう意味だったんだ。直子は颯太と大イチョウの下で話したときのことを思い出した。だから大野に絶交言い渡され

でも練習試合にこだわって…。

「んだよっ、それ最初に言えよっ」

大野が颯太の頭をばしっと叩いた。

「つまんねえ。受験終わったらまた一緒にバスケットできると思ったのに」

「ごめん」

颯太は叩かれた頭をさすって笑おうとしたけど、うまくいかなかった。両腕を顔に押し当てて、泣き出してしまった。

「泣くなよっ」

颯太の肩を乱暴に揺さぶる大野の目も、赤かった。

叱られたのでも、ケンカしたのでもないのに男の子が泣くのを見るなんて、直子は初めてだった。なんて声をかけたらいいかわからず、黙ってバスに揺られ続けた。

翌日、月曜日の朝の会で担任の吉田先生は、颯太が三学期から青森の小学校へ行くことになったと、みんなに告げた。

颯太は席を立つと、「いままでありがとう、お元気で」と、短く挨拶した。

その日から颯太の席にはさよならの挨拶をしにくる子がいっぱいいて、直子は邪魔にならないよう自分の机を隣からそっと離れた。

放課後、颯太転校のニュースを聞いたさくらは、長い髪をアップスタイルにしながら鏡越しに「あら、そう」と言っただけだった。

「えっ、それだけ？」

「直子こそ、落ち込んでるみたいね」

「落ち込んでなんかいらないよ！もうっ、人がせつかく心配してやったのに。もしかして失恋ってウソ？」

「残念ながら本当です。颯太くんのことを想うとまだ胸が痛いもん」

「それって、ちくっ、とか、ずきっ、とかするやつ？わたしは時々病気かと…」

直子が言いかけたところへ、ミニバス部のおちびたちが現れ

た。

「江並マネージャーっ迎えにきましたっ」

「あら、ごくろうさま」

さくらは、結んだ髪を優雅にゆらして立ち上がった。

「さあおちびちゃんたち。今日もがんばって練習するのよ」

はーい、とおちびたちが元気よく答える。

「おちび6をすっかり手なずけて……。さくら、これどういうことなの？」

「マネージャーは続けるわ。失恋で傷ついた心を癒すために、しばらくはこの若いメンズたちで逆ハーレムを楽しむことにしたの」

「お、恐るべし、魔性の女……」

直子があきれていると、おちびたちを引き連れ教室を出て行こうとしたさくらが、「そういえば」と振り返った。

「颯太くんってあたしと一緒にいても、直子のことばかり話すのよ。ホント天然って困るわよねえ」

「えっ」

直子は自分の顔がみるみる赤くなってゆくのがわかった。

「直子の胸の痛みの原因は、そのあたりにあるのかもね」

さくらはウィンクして行ってしまった。

「颯太のことなんて、わたしは別になんとも思っていないよ」

強がったら、また胸がちくりと痛んだ。

本当は、バスの中で泣いていた颯太のことが頭から離れなかったのだ。今日だって、教室で友だちと笑う颯太が、ときどき沈んだ表情をしていたのを直子は知っていた。

「颯太、大丈夫かな」

新しい学校にはミニバス部もないし、仲良しの大野もない。

颯太を元気づけたい。だけどどうやって？

ぼんやりと家路についた直子の足は、颯太と話したあの大イチョウのある神社へ自然と向かっていた。

大イチョウの樹に寄りかかり、しばらくの間じっと考えた。

「…そうだ！」

直子はあることを思いついた。

9. 電話でオンエア

『ドリブルハート』の放映日。

リビングの壁掛け時計を見た直子は、番組終了時間であることを確認した。パパとママに気づかれないよう、電話の子機を抱えてお風呂場にかけてこみ鍵をかけた。

いまなら『ドリブルハート』を見終えた颯太は自宅にいるはず。

緊張しながら電話番号を押して、呼び出し音を数える。

「はい、上原です」

出た！颯太の声だ。

普段の声で「もしもし」、と言いきくなった直子はあわてて自分の口を押さえた。

目を閉じ、呼吸を整える。

それからもう一度ゆっくり目を開く。

用意、スタート。

「俺、山本ヒロキです。上原颯太くん、だよな？」

「そうだけど…ってヒロキ？今テレビに出てたヒロキ？」

“そうだよ”

「ひえええーっ」

奇声とともに、受話器の向こうでがらがらと何かが倒れる音がした。

「大丈夫か？」

「いやその、妹のおもちや箱ひっくりかえしちゃって。実はいま引越し作業中…」

颯太の動揺が伝わってくる。だけどゆっくり話している時間はない。

「君に伝えたいことがある」

「な、何？」

「どこへ行っても君ならきつと大丈夫」

「うん」

誰から電話？と、後ろの方から颯太のお父さんらしき人の声が聞こえてきた。早く切らなくちゃ。

直子はあわてて颯太に呼びかけた。

「颯太くんっ」

「は、はいっ」

「勝ちたいなら方法はただひとつ。勝つまで絶対にやめないこと！：がんばれ」

そこまで一気に言うのと、直子は子機の通話を切った。

「さよなら、颯太」

子機を握りしめたまま、直子はお風呂場の脱衣所にへたりこんだ。胸のドキドキは、しばらくおさまりそうになかった。

10. この声、君に届け！

直子がブースを出ると、コントロールルームにいた例のヒゲ監督が握手を求めてきた。

「今日の芝居は実に素晴らしかった。やればできるじゃないか。」

さすが、ミラクルボイス・七海ナオだ！」

監督はヒゲをふるわせ大絶賛している。

「声に深みとツヤが加わったよ。もしかして君、恋でもしたのか？」

「どうですかね、あはは：」

笑ってごまかす直子の頭にまっさきに浮かんだのは、颯太だった。ヒロキになりきってあの電話をかけた翌日、颯太は転校先の青森でバスケットを作るつもりだと教えてくれた。

直子の気持ちは、ちゃんと届いたのだ。

「がんばってね」と声をかけたら、颯太がびっくりしたような顔をして直子を見た。

「市川の声って、ヒロキに似てるな」

「えっ」

今度は直子が驚く番だった。

「ま、気のせいかな。だってヒロキは男だし」

笑う颯太に、アニメにおける声優の役割を説明しようと直子が口を開いたときだ。

「だけどお前の声も悪くないぞ。俺、市川が授業中に教科書朗読するのを聞くの、結構好きだった」

颯太はそう言って、にいつと笑った。

直子はうつむいて小さな声で「ありがと」と言うのが精一杯だった。

今でも思い返すたびに、理由もなくかけだしたくなり、同時に胸が痛くなる。

「お先に失礼しますっ！」

直子は元気よく挨拶すると、すがすがしい気持ちでスタジオを後にした。

外に出ると、白いものがちらちらと舞っていた。雪だ。

直子はきゅっとマフラーを巻き直して空を見上げた。じっと見続けていると、雪に吸い込まれそうな気がしてくる。

「青森にも降ってるかな」

遠く離れても、つながっているものってきつとある。そう、この空みたいにな。

「わたしの声、これから颯太のところまでちゃんと届くといいな」

そう思って今日の仕事にも挑んだ。

明日も『ドリブルハート』の収録が待っている。小学生の直子は、冬休みなどにまとめて声優の仕事をこなすことになっている。

今日も帰ったら新しい台本を読まなければならない。

「よし、明日もがんばるぞーっ！」

雪の中、直子は元気よくかけだした。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9984m/>

ミラクルボイス☆七海ナオ☆

2010年10月13日05時40分発行